鹿島茂著「クロワッサンとベレー帽－ふらんすモノ語り－」

中公文庫　中央公論新社 2007 年 10 月 25 日刊を読む

「セピア色の午後── 遠い昔と近い昔、Jadis et Naguere　ジュティス・エ・ナゲール──」

１．冬のパリの午後三時。そろそろ、夕闇が忍び寄ろうとしているころ、十六区あたりの高級住宅街のサロン・ド・テをのぞくと、上品なブルジョワの老婦人たちが二人、三人と集まって、午後の紅茶を楽しんでいる光景をよく見かける。オート・クチュールの仕立てのいいスーツに身を包み、帽子に手袋、イヤリングにネックレスという「よそいき」の服装をしているが、住まいはおそらくすぐ近くにあるのだろう。きっと、足腰の衰えで繁華街への遠出ができなくなったため、近所のこうしたサロン・ド・テに、友達同士で曜日を決めて集まっているにちがいない。年のころはとみれば、七十歳、あるいは八十歳を超えているのかもしれない。

２．なにか、共通の楽しい思い出話でも語りあっているのか、ときどき、笑い声がもれる。皺の上に塗ったお白粉が笑うたびに少しずつ浮き上がるが、それでも笑顔にはなおエレガンスが残り、まなざしにも、一瞬、若かったころのいたずら好きな少女の面影がよみがえる。蚤の市で見つけたセピア色の写真の中で、少し首をかしげ、じっとこちらを見詰めていたおさげ髪の少女のイメージが、老婦人の上に重なり、サロン・ド・テのその空間だけが、瞬間的に時間の厚みを帯びる。

３．少し遠くの席に座り、こうした老婦人たちの姿をぼんやりと眺め、ささやくような会話に耳を傾けていると、なぜか、たまらなくいい気分になってくる。

４．まず、この年になってもおしゃれを忘れぬ彼女たちの矜持（きょうじ）が好ましい。スーツは当然、十六区の定番といってもいい濃紺かグレーだが、ネッカチーフのモーヴ色に、その年の流行がさりげなく取りいれられている。日本の女子大生が持つと偽物にしか見えぬシャネルのポシェットも、まさに、所を得た感じで、金色のロゴもこころなしか誇らしげに光って見える。

５．だが、なによりもうれしいのは、彼女たちの会話が聞けることである。いまではもう失われてしまった、ある階層特有の話し方、あの歌うような、音楽性豊かなフランス語の響きが、まだそこには残っているからだ。テレビの若い女性アナウンサーのような、唇の先だけで出す耳障りな音ではなく、一語一語がよく区切られていて、しかも早口でしゃべってもきちんとこちらの耳に聞き取れる明晰（めいせき）で美しい話し方。サラサラと流れる水のように、耳の中に快く流れこむ音の洪水。それは、眼福（がんぷく）ならぬ耳福とでもいいたいような快楽で、プルーストの『失われた時を求めて』のサロンの会話をこんな発音で聞けたらなあと思わせる。

6．気がつくと、すでに陽は落ち、街灯が黄色い光を投げかけている。老婦人たちは席を立つと、なごり惜しそうに、長いあいだ互いの頬にキスをしてから立ち去っていく。

7．また来週、木曜日に、ここで。

P181 ～ 183

［コメント］

哲学者の森有正先生の目で見たフランスもいいが、19 世紀のフランスの社会生活と文学を専攻なさった共立女子大学教授の鹿島茂先生の見たフランスもなかなか興味深い。自分にとって豊かな人生を目指すのであれば、自分にとって豊かな時間の過ごし方をよく考え、思い切って実行。それを続けること以外にないのかも知れない。思わずフランス語やフランス文学、フランス哲学が勉強したくなる一冊。

－ 2009 年 9 月 15 日 林明夫記－